

# 実験小説・宇宙戦艦ヤマト新たなる旅立ち異聞【第一稿】

## 注釈

本作は、宇宙戦艦ヤマト新たなる旅立ちにおいて、宇宙戦艦ヤマトが中立の立場を貫いたらどうなるのかを思考実験で描いてみたものである。

## プロローグ

カウンタの数字はあと3分だった。

ヤマトはワープへのカウントダウンに入っていた。

操縦手席で、島航海長がせわしなくチェックに余念がなかった。

戦闘班長の席で、古代は手持ち無沙汰だった。

ワープは島航海長の管轄で、戦闘班長としても、艦長代理としても、古代の出番はなかった。

もちろん、艦長代理の権限があれば、島の行動に口は挟める。しかし、島の仕事には何の問題もなく、挟むに値する話題もなかった。

南部と相原がひそひそと話をしているのが聞こえた。

「古代の奴、まだ結婚しないらしいぞ」

「まだ雪さんはフリーってことか？ なら口説いちゃおうかな」

「やめとめやめとけ。おまえ程度で釣り合う相手か。あっちは長官の秘書まで経験して、山ほど国家機密を知ってる才媛だぞ」

「そこがいいんじゃないか」

「バカッ!」

しかし、古代は聞かなかったことにした。

南部や相原は、雪が本気になる相手ではないと分かっていたからだ。彼らとて、同じ第1艦橋にいる異性だから気になるだけで、特に相原が入院中に看護婦を口説きまくったという武勇伝は有名だった。

その時、艦医の佐渡先生が古代の席にやってきた。

「もうすぐワープじゃな」

「はい」

「ワープするとイスカandalじゃ。古代、おまえはどうする」

「決まっています。スターシャさんと兄さんを助けます」

「どうやって?」

「未知の敵との交戦権は地球防衛軍本部から与えられています。ワープすると同時に全艦載機を発進させ、後からヤマトも続きます」

「未知の敵ねえ」

「佐渡先生何か疑問でも?」

「誰が敵と決めた?」

「デスラーがそのように連絡してきました」

「デスラーから見たら未知の敵なのじゃろう」

「何が言いたいのですか?」

古代の席の近くに真田技師長もやってくきた。島も手を止めて古代の方を見ている。

「イスカandalを襲っているその未知の勢力、デスラーの敵かも知れぬが、それは地球の敵なのじゃろうか? ヤマトの敵なのじゃろうか?」

「仰る意味が良く分かりません。既にイスカandalは攻撃を受けているそうです。ここで介入をしないわけには行きません」

「古代、先生が仰っているのは、もしも相手が地球の敵ではないとしても、ヤマトが一発でも撃てば彼らは敵にまわるとのことだ」島が言った。

「しかし」

「古代」と真田も言った。「白色彗星戦役からの痛手もまだ癒えていない地球に、他の星間国家と事を構えるゆとりはないぞ。相手の勢力はいくつの星を持っているのかも分からないのだぞ。百個の星を持っていたら、ヤマト1隻でその全ての星と戦えるのか?」

「だが、既にスターシャさんと兄さんは危機に曝されています」

「それに、イスカandalの近傍で波動砲を撃ってみろ。どんな影響がイスカandalに及ぶか分からないぞ」

「ううむ」

「古代」と横から島が言った。「イスカandalを助けて未知の勢力を敵に

回さないで済む方法が1つある」

「なんだそれは」

「両方の勢力に即時停戦を求めるんだよ。停戦を実現するためにヤマトは双方の勢力の間に入る。戦闘が止まれば、当面のイスカンドルの安全は保証される」

「停戦してどうするんだ?」

「交渉に決まっている。話し合いで妥協点が得られれば、戦う理由はない」

「そ、そうか……」

「じゃあワープ準備に戻るぞ。ワープ1分前だ」

「頼む、島。みんなも自分の席に戻ってくれ。もうすぐワープだ」

佐渡は慌ててエレベーターに走り、真田も自分の席に向かった。

## 第1章 停戦

イスカンドル上空にコスモタイガーの編隊が出現したとき、デスラーは驚喜した。

何しろ、ガミラス星は爆発、謎の敵艦隊はイスカンドルに矛先を向け、デスラーの艦隊は負けそうだったのだ。味方の到着は何より有り難い。何よりデスラーはイスカンドルのスターシャを愛していて、彼女を守りたかったのだ。

ところが、すぐにデスラーの顔は困惑に変わった。

コスモタイガー隊は既知のあらゆる言語で停戦を勧告し続け、どちらの勢力の味方もしようとしなかったからだ。

しかし、最終防衛ラインとして敷設した機雷原を突破されてしまえばデスラー艦隊の命運は尽きたも同然だった。

負けるよりは……と、デスラー艦隊の艦艇は次々と停戦合意の印である白旗を掲げて戦闘を停止していった。

デスラーだけはたぐいまれなる敢闘精神で、たとえ全滅するとしても戦闘を続けようとしたが、側近にいさめられ、古代から【悪いようにはしな

いから今は矛を引け】という連絡を聞き、ようやく納得して戦闘を停止させた。

結局、デスラーの目的はスターシャを守ることであり、停戦した方がスターシャを守りやすいと言われると逆らえなかったのだ。

イスカandal側の受け止め方は少し違っていた。

戦わずに交渉で……というヤマト側に提案は、イスカandalの平和主義にも合致したものであり、拒む理由は無かったのだ。

そもそも、イスカandalの住人はスターシャと古代守の2人とその娘の赤ん坊の3人きり。惑星は滅びに瀕していた。そして、大マゼラン星雲から銀河系に向けてワープを繰り返して、既に惑星の構造はボロボロだった。いつ崩壊してもおかしくない状態だった。はっきり言ってイスカandalを巡って争う理由など何もないぐらい、既に利用価値の少ない惑星だった。もはや、何の切り札にもならない惑星を巡って戦いが起こる理由そのものがイスカandal側では分かっていなかった。

そのような理由により、イスカandal側は暗黒星団帝国がイスカandalに執着する理由を知りたいと思っていたし、誤解であればそれを解く機会が欲しいと思っていたほどだ。

そのため、古代守を従えたスターシャは、ヤマトの会議室に用意された交渉場所にすぐに飛んできた。

暗黒側は少々複雑だった。

彼らの通常の対応であれば、彼らの行動の邪魔をする未知の勢力があれば、それを敵と見なすのにためらいはなかった。

しかし、彼らは大星間戦争の遂行中であり、未知の敵との交戦で無駄なエネルギーは使いたくなかった。しかも、デスラー艦隊もヤマトも未知の勢力だった。少なくともデスラー艦隊はそれほどの強敵というわけではなかったが、未知の勢力を2つも一緒に相手にすることのリスクは大きかった。何を隠し持っているか分からないからだ。

少なくとも状況だけは把握する必要があった。

暗黒側の艦隊司令官であるデーダーは搭載艇でヤマトに向かった。

その際、遠隔スキャンで敵艦の性能を詳しく探った。

デスラー艦のデスラー砲は大したことはないが、ヤマトの波動砲は危険であることを察知できた。あれを撃たれると、どんな暗黒艦であろうとも危険だ。

デーダーは、即座に方針を転換した。

当初自分が交渉役として乗り込むつもりだったが、ヤマトの波動砲は著しく危険だし、デスラー艦の隠し球、デスラー砲を前にしては彼の旗艦ブリアデスですら、勝てるか怪しい。武力を背景に交渉を有利に進めるなら、それは好ましいことではなかった。デーダーは即座に上司のメルダーズと、彼の自動惑星ゴルバの交渉役参加を願い出た。ゴルバならデスラー砲にも負けない。それでもヤマトには勝てない可能性があるが、ゴルバはこの近くで投入可能な暗黒側の最強戦力だったのだ。せめて試作中の無限ベータ砲が間に合ってくれればとベーターは願った。あれさえ間に合えば、暗黒側が主導権を握れる。

デーダーはヤマトに乗り込むとメルダーズのゴルバ到着を待つて欲しい旨を伝えた。

「我々に領土的な野心はない。戦争も望まない。我々は現に他の宇宙で戦争を遂行中であり、そちらで勝たねばならないのだ。ただイスカンダルに埋蔵している地下資源のイスカンダリウムさえ入手できれば満足なのだ。そのためには適正な代価を払っても良い」

思いの外シンプルで紳士的な要望に、ヤマト側に乗組員達は驚いた。

領土や資源を奪う野心さえ無ければ、これは交渉のテーブルに載る。戦わないで解決できるかもしれない。

デスラーはすぐにはヤマトに来られなかった。

損傷艦をイスカンダルのドックにまわし、半ば強奪するようにイスカンダルの倉庫から医薬品を調達して負傷兵に与えねばならなかったからだ。

戦闘の結果、暗黒側の犠牲者はほとんど即死だったのに対して、デスラー側の犠牲者は大気圏内の海の上であったことが幸いし、治療を要する者が多かったのだ。

そして、デーダーがメルダーズの到着を待つて欲しいと願い出たこともデスラーには有利だった。急いで交渉の席に行かずとも良くなったからだ。

そこでデスラーは急上昇する部下のヤマト人気を意識することになった。

デスラーはスターシャを愛していたが、部下の兵士はイスカンダルのことを、夜空に浮かぶ最も明るい星ぐらいにしか思っていなかったのだ。いや、ガミラス本星出身ではない兵士は机上の知識でしかなかった。ガミラス本星のためならともかく、そんな縁もゆかりも無い星のために死ぬのはあまり気が進んでいなかった。もちろん鉄の規律があるガミラス軍である以上、命令されれば誰もノーとは言わない。しかし、ノーと言わないことと気が乗らないことは、同時に両立可能だったのだ。だから、戦闘を止めてくれたヤマトは彼らから見れば大恩人だった。

戦闘を再開しないよう、上手く交渉をまとめてくれ……という兵士達の希望は、デスラーの背中に重くのしかかった。彼らはデスラーのため、ガミラスのために死ぬ覚悟はできていたが、イスカンダルのために死ぬ覚悟は持ち合わせていなかったのだ。

デスラー本人はもともとスターシャ本人の身柄の安全さえ確保できれば、星としてのイスカンダルぐらい相手に与えても良いと思っていたほどだった。デスラーが愛した相手はスターシャであり、イスカンダルではなかったのだ。

だが、その気持ちは古代守と仲むつまじいスターシャの姿を遠くに見ると心が揺らいだ。

戦闘に突入する際には激情に駆られていて気づいていなかったが、落ち着きを取り戻すと繰り返し自問せざるを得なかった。

俺は何のために戦ったのかと。

古代守や、娘のためではなかったはずだ。

## 第2章 交渉

海上のデスラー艦隊と、軌道上の暗黒艦隊はにらみ合っていた。

宇宙戦艦ヤマトは中間にあって、双方に睨みを利かせていた。

コスモタイガー隊が交代で警備のために巡回飛行していた。

結局、どの勢力も戦いを望んでおらず、切っ掛けさえあれば交渉のテーブルにつく用意はできていた。

良かったと古代はホッとした。

もし戦っていたら、イスカンドルを背後に置いて盾にした暗黒艦隊に波動砲が撃てないところだった。戦わずに停戦を求めたのは正解だった。

唯一の問題は、暗黒側の司令官デーダーが、自分は交渉には不適任として交渉役として上司のメルダーズを指名し、彼が到着するまで交渉開始が遅れたことだ。

しかし、それは悪いことばかりではなかった。

デスラー艦隊の者達は休息を得ることができたし、各陣営は情報の収集と整理も可能となった。

やがて、交渉役となるメルダーズが乗った自動惑星ゴルバがワープアウトしてきた。

それを見た真田がうなった。

「古代、うかつに交戦しないで良かった。あのゴルバの装甲は、波動砲でも通用するか分からないぞ」

「真田さん、それほどの敵ですか？」

「できれば敵に回さない方が良い相手だ。交渉で上手く話がまとまれば、それが最善だ」

「もし敵にまわったら打つ手無しですか？」

「いや。内部に潜入して破壊してしまえばいいのだよ。都市帝国戦を思い出せ」

「なるほど」

「だがそれは避けたい」

「第2の斉藤は出たくありませんね」

「そうだ。次は自分の番かもしれないいつも考えるよ」

「相手が強力なら、交渉を仕切るのは難しいかもしれませんね」

「交渉の際はハッターも必要だ。地球には波動砲搭載の戦艦が百隻あると言え。それだけの波動砲を同時に撃てば、ゴルバの装甲も破壊できるだろう」

「戦艦はほとんど白色彗星に沈められてしまいました」

「ハッターだよ、ハッター」

真田は笑いながら行ってしまった。

交渉の第1日目は、自己紹介と交渉すべき項目のリストアップが行われることになった。異論反論は後回しにして、とりあえず言いたいことを言おうということだ。

交渉の参加者は、ホストの地球側、暗黒星団帝国、ガミラス、そしてイスカンダルだった。地球側はあくまで会議を主催するホストであり、どの勢力の味方もしないことになっていた。しかし、古代進と古代守が兄弟であることは隠されなかったもので、地球は暗黙的にイスカンダルの味方であることは誰もが認識するところとなった。しかし、それでも問題はなかった。当面の問題の大半は、暗黒星団帝国とガミラスの関係にあったからだ。

それぞれの陣営からは2人ずつ出席することになっていた。

地球からは古代進と真田が出た。

暗黒星団帝国からはメルダーズとデーダーが出席した。

ガミラスはデスラーとタラン。

イスカンダルはスターシャと古代守だった。

古代進は議長として最初に自己紹介した。

「宇宙戦艦ヤマト艦長代理、古代進。こちらは技師長の真田志郎。我々の望みは、全ての勢力が停戦に合意し、これ以上の戦いが起こらないことです」

次は暗黒星団帝国だった。

「私はマゼラン方面軍総司令のメルダーズ。こちらは、第1艦隊司令ゲイター。我々の望みは、ガミラシウムとイスカンダリウムの入手だ。イスカンダルには、イスカンダリウムの引き渡しを望んでいる。ガミラス艦隊に対しては、せつかくガミラシウム採掘中だったガミラスを破壊され、とても迷惑を被ったので、何らかの補償を求めたいと思うが、そこは交渉次第で妥協しても良いところだ。我々の任務はあくまでガミラシウムとイスカンダリウムの入手であって、報復は任務に含まれていないからだ」

次はガミラスだった。

「ガミラスの総統デスラーだ。こちらはタラン将軍。宇宙戦艦ヤマトによってガミラス星を無人の惑星とされ、白色彗星帝国の作戦行動に同調して銀河方面で艦隊を運用していたが、戻ってみるとそちらの勢力が無断でガミラスに入り込んで採掘を行っていた。排除するために戦闘を行ったところ、ガミラス星ごと吹っ飛んでしまった。その点に関しては補償を求めたい。イスカンダルに望むことは、スターシャの安全が完全に確保されるまで艦隊をイスカンダルに駐留させる許可だ。地球側に望むことは、もし暗黒星団帝国が交渉を決裂させたとき、共同で撃退することだ。ヤマトならためらわず、宇宙の正義のために一緒に戦ってくれるものと信じる」

次はイスカンダルだった。

「私はイスカンダルのスターシャ。こちらは夫となる古代守。全ての勢力に望むことは、戦闘艦のイスカンダルからの退去と、問題解決の手段としての戦闘行為の即時放棄です。戦闘行為が目的であれば、イスカンダリウムは提供いたしません」

1日目が終わってみれば問題は山積だった。

問題は大きく分けて2つあった。

1つは、ガミラス星崩壊に関して、暗黒星団帝国側もガミラス側も大きな痛手を受けており、相手からの補償を求めていることだ。ガミラスの崩壊は偶発的な事故であり、どちらかの勢力が意図的に破壊したわけではない。それゆえに、どちらも責任は相手側にあると言う態度を崩しておらず、話は平行線だった。

そして、この話にはもう1つの爆弾が隠れていた。そもそも、デスラー砲すら使用していない小規模戦で、ガミラス星そのものが崩壊するわけではない。いくら暗黒が地面の奥深くまで穴を掘って地下資源を採掘していたとは言え、それが星の崩壊につながるはずはなかった。採掘していたのがガミラシウムという放射性物質であることもあまり意味がなかった。放射性物質である以上、精製して臨界量以上を集めねば爆発など起こるはずがなく、ここで暗黒が行っていたのは精製抜き採掘だけであった。結局、なぜガミラス星が崩壊したのかと言えば、もともと崩壊しつつあったからとしか言えない。そして、なぜ崩壊しつつあったのかといえば、原因はヤマトしかあり得なかった。いくらガミラス星の星としての寿命が近いと言っても、天文学的なスケールの話だ。5年や10年で消えてしまうことはあり得ない。その余命を縮めたのは、ヤマトがガミラス星の海底で発射した波動砲以外にあり得なかった。本来なら星すらも破壊する波動砲だが、星ごと崩壊してはヤマトもただでは済まない。そこで、出力を絞って海底火山脈に刺激を与える程度の出力で発射されてはいるのだが、実際にはヤマト側の予想以上の効果を発揮していた。本来は、反撃の糸口を掴むだけで良かったのだが、実際にはガミラスの多くの都市を滅ぼすほどの効力を発揮していた。このとき、どこまでの悪影響をガミラス星そのものに与えていたのかヤマト側の誰も評価していないのだ。

そして、あっさりとガミラス星を見捨てて新天地を模索するデスラーの態度は、ガミラス星そのものがもう長くないという証拠そのものだった。もし星の余命が数百年単位で残っているのなら、デスラーはガミラス星を根城に新天地を模索するはずだからだ。その程度のガミラス星への愛着はあったはずなのだ。

つまり、中立の立場で交渉のテーブルをセットしたはずのヤマト側が、当事者として論争に巻き込まれる可能性があったのだ。もちろん、ヤマト側にも言い分はある。しかし、中立という立場は崩れる。もし、採掘施設喪失の半分の責任がヤマトにあると暗黒側が糾弾してきた場合、ヤマトには補償の手段が無かった。

もう1つは、イスカンダリウムの問題だった。暗黒星団帝国は、遂行中の星間戦争のためにイスカンダリウムを欲していたが、イスカンダル側は戦争目的での供与を明快に否定していた。イスカンダル側に対する照会では、イスカンダリウムのストックは倉庫に多くあり、それ自体が時代遅れの鉱石で使い道が無いので、条件さえあれば喜んで渡すという話であった。実際、イスカンダルの波動エンジンは、イスカンダリウムを必要としていない。だからヤマトもイスカンダリウム抜きで航海している。あっても無駄になるだけの鉱石なら譲っても問題は無いわけだ。しかし、【戦争に使われるのは困る】というスターシャの平和主義が、現在戦争を遂行中の暗黒星団帝国と完全に噛み合っていなかった。スターシャは殺さないためにイスカンダリウムの提供を拒否し、暗黒は殺されないためにイスカンダリウムを欲したのだ。

対策を考えるために、古代、島、真田、佐渡が集まった。

古代、島、真田の3人は頭を抱え、佐渡は気楽に酒を飲んでいた。

「どうする古代。割と上手く妥協点を探れると思って交渉を促したが、どの議題も平行線になりそうだ」真田が言った、

「俺が思うに」と島は言った。「暗黒が本当に欲しいのはイスカンダリウムだけだ。イスカンダリウムさえ渡せばあとは妥協してくれると思う」

「だが、イスカンダルは渡さないとやっている」

「そこだよ」と島は言った。「第3国経由で流せないか？」

「どういう意味だ」

「我が国が戦争にイスカンダリウムを使いませんと誓書を書いてイスカンダルから受け取る。その後でそれを暗黒に渡すんだ。我々は戦争に使わないから嘘は言っていない」

「それは詐欺じゃないか。イスカンダルを騙すことになる」

「だが他に方法がない」

真田が身体を乗り出した。「こういう方法はどうかろう」

「どんな方法ですか？」

「デスラー艦隊が持っているガミラシウムを全て暗黒側に渡し、その代

わりにイスカンダリウムを積み込むのだ。両者はほぼ同じ物質なので、イスカンダリウムがあればデスラー艦隊は稼動できる」

「ダメだ。デスラーは戦闘に使うと言って、イスカンダリウムの提供はスターシャさんが拒むだろう」

「修理のためのドックは許可してもか?」

「そうだが、兵器の修理までは許していない。そこはガミラス兵が自力で直している」

「そこまで徹底しているのか、スターシャの平和主義は」

「地球も見習いたいものだな」

「ところでガミラス星崩壊の責任問題はどうする?」島が言った。

「それはもう、ガミラスと暗黒の問題なので、彼らの議論に任せよう」

「話がまとまらないようなら?」

「誰が悪いとも言えないので、ガミラス、暗黒、地球が共同でガミラス星の記念碑を建設して終わるといふ提案をしてみるさ」

2日目は、ガミラス星崩壊の責任問題が議論された。

だが議論はすぐにすれ違った。

皆から空虚なかけ声だけが発せられ、空虚なのですり抜けてしまったのだ。

原因は簡単だった。

ガミラス星崩壊の現場に居合わせて生き残っているのはデスラー艦隊だけだったからだ。しかも、彼らとて、子細に崩壊を観察していたわけでも記録を取っていたわけでもなかった。崩壊から脱出するのに精一杯で、崩壊過程の詳細は分かっていたいなかった。

暗黒側で崩壊を間近で見て生存したものはいなかった。メルダーズはその場にいなかったし、デーダーは遠距離から崩壊するガミラス星を見ただけだった。あまりに突然のことだったので、データすら記録していなかった。

真田は、まずは事実関係の確認が先決として、両陣営に可能な限りその時点での行動を報告させた。

「デスラー総統に質問します」真田が言った。

「良いだろう。許す」デスラーはうなずいた。

「ガミラス星に戻った理由は？」

「新天地を探す前に、最後のお別れをするためだ」

「なぜお別れが必要だったのですか？」

「予定してはいなかったが、部下の士気を鼓舞するために必要だったからだ。これからまだ長い流浪が必要だったのでな」

「なるほど。そして、暗黒の採掘施設を発見したわけですね？」

「そうだ」

「その時、どう思いましたか？」

「大切なガミラス星は渡せないと」

「渡せない？ それはどういう意味ですか？」

「ガミラス星の崩壊は近かったがそれでも我が領土だ。思い出も多い。無人であることと所有権を放棄したことは違う」

「つまり、暗黒には領土的野心を感じたと？」

「そうだ」

「しかし、ガミラス星の寿命は尽きていたわけですよ？」

「まだ若干の地下資源を採掘できる余地はあったのだ。あわよくばガミラス星でガミラシウムの補給ができれば、という期待もあった。しかし、最後の鉱脈は暗黒の手で既に採掘されていた」

「なるほど。暗黒側に反論はありますか？」

「あるぞ」とデーダーが身体を乗り出した。

「どうぞ」

「我々に領土的な野心はない。単にガミラシウムが欲しかっただけだ。適切な対価を払って買っても良かった」

「だが勝手に採掘した」とデスラーは不愉快そうに言った。

「無人だったからだ」とデーダーは言った。「交渉相手が不在では交渉できない。人がそこにいれば交渉している。現に我々はイスカンダルとはイスカンダリウムの提供に関して交渉していた」

「空き屋にした私が愚かだと言いたいのか?」とデスラーが拳を振るわせた。

「まあまあ」と古代が取りなした。「あそこはもう住める惑星ではない。無人でも止むを得ないだろう」

「連絡を取ろうとはしなかったのかね?」とデスラーは不遜な態度で暗黒人達を見下ろした。

「したとも」とデーダーは答えた。「ガミラス人連絡先について、イスカンダルに照会したのだが、知らないというばかりだ。ガミラス星の壊滅後、一度艦隊が集結してどこかに飛び去ったことは知っていて、その時の傍受した通信から行き先が銀河方面だとは分かっていたが、具体的にどこなのかも分からなかった」

「スターシャさん、それは事実ですか?」と古代はイスカンダル代表を振り返った。

「ええ。ガミラス星周辺に艦隊が集結したときは、ダメになったガミラス星の代わりにイスカンダルを奪いに来る可能性もあるので警戒しました。しかし、彼らは復讐のためにヤマト打倒を叫んで銀河方面に飛び去りました。その後のことは分かりません。確かに暗黒側からは残存ガミラス人の所在を質問されていますが、こちらにも分からない旨は申し上げました」

「そのヤマトとは、この交渉を仕切っているこのヤマトのことかね?」とメルダースが質問した。

「そうだ」とデスラーは答えた。

「なぜ復讐相手の戦艦に、こうして平然と乗っていられるのだ?」

「いろいろあってな」とデスラーは不愉快そうに言った。「白色彗星という共通の敵が生まれて共闘した結果、和解したのだ」

「その白色彗星はどうなりましたかな?」

「もう滅んだよ」

メルダースは何を思ったのかそれ以上何も言わなかった。

「ではメルダースさん。次はあなたの側の行動です」

「現場指揮の責任者は彼だ。彼に説明させよう」

デーダーが咳払いした。

「我々は戦争を遂行中であり、新しいエネルギー源を必要としました。しかもすぐにパワーを発揮する瞬発力のあるエネルギー源です。そこで、我々はガミラシウムとイスカンダリウムという物質に目を付けました。それはガミラスとイスカンダルにしか産出しないというので、我々は大マゼランのサンザーに派遣されました。本来は交渉を行うのが筋ですが、ガミラス星は無人で崩壊も近かったので、採掘施設を置いて即座に採取を開始させました。イスカンダルの方は住人がいたので交渉に取りかかりました」

「イスカンダルとの交渉はどうなりましたか？」古代は質問した。

「当初、話はスムーズに進みました。使い道の無いイスカンダリウムが倉庫に多数眠っていて、条件さえ折り合えば提供できるというのです。多少の交渉権は認められていたので、妥協すれば入手は確実だと思っていました」

「でも、できなかった？」

「ええ。使用目的が戦争だと分かると、提供を拒んできました。そこから交渉は平行線です。いろいろな妥協案を練ってみましたが、いずれも却下されました」

「スターシャさんの平和主義からすれば当然だと思います」

「しかし、我々は戦争を遂行中であり、即効性のあるエネルギー源は必要です」

「では、なぜ強引に武力で奪い取ろうとしなかったのですか？」

「ガミラシウムの採掘は順調で、当面はそれで十分だったからです」

「すると、イスカンダリウムは必要が無かった？」

「いえ。ガミラシウムを取り尽くした後で、イスカンダリウムは必要になります」

「交渉が長引いてもイスカンダリウムが欲しかった理由ですか？」

「そうです。我々は可能な限りガミラシウムとイスカンダリウムが欲しい。戦争に勝って生存するためです」

スターシャは不愉快な顔になり、古代はため息を付いた。

真田が宣言した。「一度、休会としましょう」

古代と真田が控え室に戻ると佐渡先生が酒を飲んでいて。

「佐渡先生、何か用事ですか？」

「おお。古代か。交渉はどうなった？」

「どうにもどの議題も進展しませんよ」

「古代。1つアドバイスがある」

「なんでしょう」

「誰もが本音を語っていると思うなよ」

「どういう意味ですか？」

「自分達で考えるんだな」と佐渡は酒瓶を持って控え室を出て行った。

「真田さん、どういう意味でしょう？」

「実は古代。薄々気づいてはいたのだが、彼らは本音を言っていない可能性があると思う」

「といたしますと？」

そこでドアがノックされた。

「どうぞ」

古代守が入ってきた。

「兄さん! どうしてここに？」

「なに1つだけ弟と旧友にアドバイスしようと思ってな」

「アドバイス？」真田が眉をひそめた。

「スターシャの夫として言おう。スターシャは美しくしとやかに見えるが、とても気性は激しいぞ。目と鼻の先の大軍事帝国のガミラスに逆らって、ピンチの地球を救うためにコスモクリーナーを提供したことからも分かるだろう」

「何を言いたいんです？」古代進は首を傾げた。

「そういうことか」と真田はうなずいた。

「えっ？」古代進は兄と真田の間で視線を往復させた。

どうやら分からなかったのは古代進だけだったようだ。

真田と古代進はヤマトの甲板に出た。

大気圏内を停泊中のヤマトからは、眼下にイスカンダルの美しい海と島々が見えていた。

「いいか古代」と真田は言った。

「なんでしょう」

「この交渉、先が見えなくなってきたぞ」

「それはどういう意味ですか？」

「上手く妥協点がみつかればまとまるが、相手の裏をかこうとする者達が上手く立ち回ると交渉の場そのものが崩壊するぞ」

「なぜです？」

「本音を言っている勢力が1つも無いからさ」

「えっ？」

「我々だってそうだ。本国には波動砲装備の戦艦が百隻あるというハッタリで交渉を始めさせた」

「それは確かにそうですが……。スターシャさんの平和主義は、スターシャさんらしいと思うのですが、間違っていますか？」

「それはそうなのだがね。我々は1つ見落としていたことがある」

「それはなんですか？」

「スターシャさんは今や母なのだ」

「それが何だというのですか？」

「娘の安全も配慮しなければならない、ということだ」

「意味が分かりません」

「実はさっき確認した。スターシャさんは、戦争目的のイスカンダリウムの提供を拒否しているはずであり、デスラーへの提供も拒んでいるはずだが、実はガミラシウムが欠乏している若干のガミラス艦に対してだけはイスカンダリウムを提供しているのだ」

「まさか」

「スターシャさんはイスカンダル本土への軍事的侵攻を警戒している」

「娘が直接的に危機に曝されるということですね？ ですが、相手は紳士

的です」

「そうだ。暗黒は交渉をまとめて代価を払ってイスカンダリウムを入手したいと言っている。ガミラス星を勝手に掘ったのはそこが無人だったからだ」と主張している。でもそれは本音だろうか?」

「違うのですか?」

「デーダーのプレアデスからメルダーズのゴルバに送信された暗号の一部が解読できた。内容はイスカンダルの詳細な地図だった」

「どうして地図が」

「プレアデスがイスカンダルの周回軌道にいた理由を、彼らは交渉のためと言っていたが、実は地図を作るためだったのだ」

「地図と侵攻が結びつきません」

「一般的に、測量は攻撃の意図を示すことそのものだ」

「ですが、暗黒にとってのメリットが分かりません」

「古代、よく考えてみろ。彼らは戦争を遂行中なのだ」

「だから何ですか?」

「戦争には莫大な費用が必要だ。イスカンダリウムの代価を払えるだけの余力があるかどうか分からないぞ。しかし武器なら潤沢にある。戦争中だから量産されているはずだ」

「まさか」

「そうだ。武器で脅してタダでイスカンダリウムを巻き上げたいのが暗黒の本音だろう。その本音が透けてみえているから、スターシャさんは最低限のイスカンダリウム供給をデスラー艦隊にこっそり行っているのだろう」

「交渉の前提が根底から崩れます」

「そうだ。この交渉に意味など無かったのだ」

「ですが、なぜ暗黒はまだイスカンダル侵攻を開始していないのですか?」

「百隻の波動砲搭載戦艦のハッターにまだ怯えているからだろう」

「しかし、それは嘘です」

「そうだ。だが、当分はバレない。暗黒は地球の位置をまだ知らないの

だ」

「それじゃ……」

「暗黒は何かを待っている」

「何をですか？」

「おそらく、百隻の波動砲搭載戦艦も圧倒する何かだ」

古代にはそれがどのようなものか想像もできなかった。

ただ、ヤマトが負ける日がたとえあろうと、波動砲が負ける日など想像もできなかった。

### 第3章 決裂

3日目のテーマはイスカンダリウムの扱いについてだった。

ガミラシウムとイスカンダリウムを持って帰れと厳命された暗黒人は、せめてイスカンダリウムだけでも持ち帰られねばと必死に粘った。

しかし、スターシャ側も戦争目的なら渡せないという一線を引いて粘った。

第3国を迂回するアイデアや、イスカンダリウムとは言いがたい未精製の鉱石を渡すというアイデアも、両者を妥協させるには至らなかった。

また金額の問題でもなかった。

事実上、無制限の金額を提示する暗黒側の白紙提案すら、イスカンダルは蹴ったからだ。

デスラー艦隊が備蓄しているガミラシウムの提供に関して、暗黒側は興味を示した。だが、それに相当するイスカンダリウムの供給がイスカンダルに拒否されると、暗黒側に渡せるものでもなかった。

話の流れが突然変わったのは、暗黒が交渉相手をイスカンダルから地球側に切り替えたときだった。

彼らが行っている戦争の相手とは、アンドロメダ銀河の勢力であり、白色彗星を送り出してきた勢力と同じではないかというのだ。

第2の白色彗星がまた地球を襲う可能性もあるという。

暗黒と地球は軍事同盟を結ぶべきだというのだ。

しかし、ここで示されたのは可能性に過ぎない。

しかも、本当に彼らが戦っている相手がアンドロメダ星雲人であるかも分からない。

ガミラス人もイスカンダル人も地球人も、暗黒人と会ったのはこれが初めてなのだ。

ここで地球側も混乱し始めた。

暗黒は油断できない相手ではあったが、よりパワーアップした第2白色彗星が地球に迫ったとき、テレサを欠いた地球側に守り切れる確証などなかったのだ。

しかし、彼らの言い分が事実だという保証も無い。

デスラーも議場以外で奔走していた。

配下の一部の艦がイスカンダリウムを受け取ってしまった事実を知ってしまったのだ。しかし、本格的なイスカンダリウムの供与は拒否された。これから、行き先の決まっていない長い流浪を始める以上、イスカンダリウムはあるだけ欲しい。しかし、今提供されているのは、1回の本格的な戦闘をこなせるかどうかの微量だ。議場の外で、スターシャとデスラーの交渉は続いていた。

結局、暗黒が地球側に【受諾】とも【拒否】とも答えがたい提案を突きつけたのは時間稼ぎだった。

翌日、巨大な物体がワープアウトしてきたことで、混乱は終息した。

メルダーズはゴルバから通信を送り宣言した。

「これはグロデーズ試作3号艦。新兵器の無限ベータ砲を装備している。無限ベータ砲は単体では波動砲に劣る威力しか出せないが、ガミラシウムを触媒に使用することで無限の射程と破壊力を得られる。たとえ百隻の波動砲搭載艦が来ようとも、無限ベータ砲が波動砲の射程外から全艦撃沈してくれよう」

「古代。これで彼らがガミラシウムとイスカンダリウムに固執する理由が分かったな。その無限ベータ砲という兵器で使用する触媒なのだ」

「しかし、ガミラシウムは暗黒に送られる前に失われたはずです」

「おそらく、サンプル品が少量だけ先行して送られていたのだろう。触媒だから、量は少なくとも良いのだろう」

「まさか」

無限ベータ砲の威力を証明するために、それは発射され、無人の天体が2つ即座に崩壊した。

「確かに波動砲以上の破壊力と射程だ」と真田は感心した。

「真田さん、何か対策はないんですか？」

「落ち着け古代。あれは百隻の波動砲搭載戦艦の対策のために呼ばれただけで、おそらくイスカンダルそのものは撃てない。イスカンダルの海上にいるデスラー艦隊もイスカンダルの空中にいる我々も当面は安全だと思っ

「そうか、イスカンダルを破壊してはイスカンダリウムが手に入らないのか」

「どうする、古代。地球から増援を呼んで対決するのは無理だぞ」

「真田さん。交渉を続けましょう」

「なぜだ。交渉は暗黒にとって時間稼ぎだった。今更交渉には乗ってこないだろう」

「待って下さい。彼らが戦争を実行中なら、ここで無駄な戦力は消費したくないはずです」

「古代。分かった、乗ってくるものなら交渉を継続しよう」

交渉の継続は、すぐに実現した。

ただし、今回は勝者である暗黒がホストになり、交渉の内容は停戦交渉だった。

交渉場所は、イスカンダルの大地に着陸したゴルバだった。

古代らは搭載艇で、ゴルバと往復することになった。

ヤマトとデスラー艦隊の全ての武器には、封印のシールが貼られた。

このシールを剥がしたことは即座に伝わり、シールを剥がした艦は即座

に撃沈されるものとされた。その宣言を有効にするだけの戦力を暗黒は既に揃えていた。

暗黒と全面決戦を主張したデスラーも、古代とスターシャの説得で怒りの気持ちを収め、当面の交渉を受け入れた。

もはや、彼らに残された武器は言葉だけだった。

## 第4章 不倫

停戦交渉に出てきたメルダーズは太っ腹だった。

彼らが本当に欲しいのは、量産された無限ベータ砲の威力をアップするためのイスカンダリウムだけだった。イスカンダリウム入手を確実にするために、スターシャと古代守の娘を人質として差し出すことを要求した。

ただし、この人質は埋蔵されたイスカンダリウムの全量を採掘した後で無傷で返すと約束した。

ヤマトとデスラー艦隊は、イスカンダルと暗黒の勢力外にいる限り、好きにして良いと言われた。ヤマトが地球に帰還しようと、デスラーが第2の故郷を探そうと、妨害はしないというのだ。いつでも、無限ベータ砲で撃破できるという自信があればこそだろう。

隙あらば反撃の機会を窺っていたスターシャ、古代、デスラーの3人に微妙な空気が流れたのはこの後だった。

暗黒はスターシャと古代守の娘を人質に求めただけで、スターシャと古代守には何の興味も無かった。バラバラに退去を要求するだけだった。一緒にいては共闘されかねないからだ。

そこで、第2の故郷を探すデスラー艦隊にスターシャを、地球に帰還するヤマトに古代守を乗せて戻ってくるなという要求が出された。2人を引き離すためだ。

だが、それはデスラー側にもヤマト側にも波紋をもたらした。

もともとデスラーはスターシャを愛していたのだ。しかし、スターシャは古代守と結婚してしまった。すっかりスターシャを諦めていたデスラーだが、お邪魔虫の古代守抜きにスターシャを預かるのは、昔の情熱の再熱

を意味した。

ヤマト側でも、古代守は真田の旧友であり、古代進の兄だった。しかも、本来ならヤマトで地球に連れて帰りたい逸材だった。

ある意味で、メルダースの名捌きだった。

各勢力間にある微妙な空気の落差を読んで、厳しい要求の他にエサも投げ与えたのだ。要求を呑むのはイヤだが、エサは欲しいと思わせる命令だった。

また、デスラー艦隊にもヤマトにも、スターシャと古代守の娘の姿を見た者はなく、彼女が人質になったとしてもあまり具体的な感慨はなかった。

こんなところで終わりの見えない駆け引きを続けていたくない、という厭戦ムードもヤマト艦内に蔓延しつつあった。

後はこのまま地球に帰還することになってもやむなし、というムードが第1艦橋にも生じつつあった。何しろ、ヤマト単艦どころかデスラー艦隊と共闘してすら勝てるか分からない敵だ。しかも、白色彗星戦役の痛手からまだ回復していない地球からは増援も期待できなかった。暗黒はまだ【百隻の波動砲搭載戦艦】というハッターを信じていて、無限ベータ砲で警戒を怠っていなかった。しかし、ヤマト艦内は、そんな戦艦部隊は存在しないと分かっていたので、既にいかに少ない損害で撤退するのかに注意が向いていた。

乗組員の大半が既に地球への帰還のことだけを考えていた。

古代進ですら例外では無かった。

やがて、メルダースの命令に従い、古代守が1人でヤマトに乗り込んできた。

そして一喝した。

「馬鹿野郎。このまま地球に戻るだと？ 何を考えている」

「でも兄さん」

「兄さんじゃない!」

古代守は叫んだ。

「いいか良く聞け」と守は言った。「暗黒は現在良く分からない相手と戦

争中だから、我々にエネルギーは割きたくない。これは事実だろう」

「そうだろう？ 彼らと対立する意味なんてないんだ。彼らは我々に興味が無い」

「だから馬鹿だと言うんだ」

「兄さん……」

「いいか進。彼らには領土的な野心がある」

「でも、イスカンダルへの領土的な野心は、あくまでイスカンダリウム入手のためだけだと。取り尽くしたら立ち去ると言っているし」

「そうだ。先が見えた古い星などに興味は無いだろう。だがまだ若々しい地球はどうだ？」

「えっ」

「今やっている戦争が終わったら次は地球かもしれない」

古代は考え込んだ。

「よく考えるんだな」

古代守はそれだけ言い残して食堂に向かった。

「ヤマトに乗ったら久しぶりに地球の飯が食いたいと言っていたな」と真田が古代の横に現れた。

「真田さん」

「古代守の言う通りだ。我々はどうやって反撃するか考えねばならん」

「しかし、どうやって……」

「分からない。しかし粘れば道は開けるはずだ」

そこに、森雪が現れた。

「あの……古代君。1つ提案があるんだけど」

「なんだい雪」

「1つだけ、暗黒の裏をかく方法があるの」

真田が微笑んだ。「雪が提案とは珍しい。提案を聞こう」

ヤマト側から暗黒側にいくつかの提案が出された。

1つは、これを機会にガミラスとヤマト合同で白色彗星戦の検討会を開

きたいというものだった。場所は、飛行甲板に広いスペースが確保できるという理由でデスラー艦が推薦されていた。暗黒側はイスカンドル人が移動しないことを条件にそれを許可した。移動には暗黒側に搭載艇を使用し、通告外の人員の移動は禁止された。スターシャそっくりの女が乗り込んで暗黒兵を驚かせたが、あれは地球人の森雪だと言われて納得した。確かに事前通告にあるヤマトの乗組員だ。しかも、スターシャはデスラー艦におり、ヤマトからデスラー艦に移動するわけがない。戦術ボード上に各種艦船、航空機のコマが並べられ、将棋の感想戦のような形で、ヤマト側とガミラス側で【あの時はこう考えてこのような行動に出た】と相互に説明して、それぞれの戦術を検討した。それはそれで有意義な会合だった。むしろ盛り上がりすぎて時間を超過しそうになった。帰還する際は、ぎりぎりの時間に搭載艇に全員が乗り組んだほどだ。そのため、暗黒側の人員の確認は少しおろそかになったかもしれない。しかし、人数と顔写真だけは確実に確認された。ヤマトの者達は来たときと同じ人数だけきちんとヤマトに戻った。別の顔を持つ誰かがすり替わっていたということもなかった。

検討会終了後に提案されたのは子守だった。地球とイスカンドルのハーブである赤ん坊の面倒は、暗黒人には難しいだろうとして、ヤマトから1名を派遣することが提案された。実際、子供の面倒を見られるスタッフを欠いたグローブズ試作3号艦ではその提案が歓迎された。試作艦なので、データを取るための技術スタッフは充実していたが、子供を扱える者は誰もいなかったのだ。

森雪が指名されておむつの山を抱えてグローブズ試作3号艦に移動した。その後、グローブズ艦内の全ての場所におむつが干されるようになったが、それが禁止されることはなかった。人質の維持は最優先だったからだ。その結果、全艦から匂いが臭いという苦情は出たのだが、それは当面我慢せよと通達された。人質としての価値は匂いを上回ったからだ。

次に提案されたのはヤマト、デスラー艦隊の出発前の人質の安全確認だった。

人質をヤマトやデスラー艦に連れて行くことは許可されなかったが、暗

黒に占領されたイスカンダルの指定の場所で、スターシャと古代守の娘との面会が許可された。

武器を持った暗黒兵が多数取り囲む中、草原の丘の上で森雪に抱かれた赤ん坊は、古代進、古代守、デスラー、スターシャが見守る中、姿を現した。

思わずスターシャと古代守が近づこうとしたができなかった。

透明のバリアがあり、一緒になることは許されていなかった。

ただ、安全にそこにいることを目で見確認することしか許されていなかったのだ。

同じその場にいながら、父母と娘は抱き合うことすら許されていなかった。

メルダーズとデーダーはその光景を見て微笑んだ。

既にプレアデスの格納庫は、イスカンダリウムの備蓄で満杯だった。そして、ゴルバの胴体は既に半分以上地中に埋まっていて、地下に残るイスカンダリウムを掘り出すのも時間の問題だった。

あとは人質さえ彼らに戻さなければ、全て上手く行く。

その時、赤ん坊を抱いた森雪が誰も想像していなかった言葉を発した。

「イスカンダル王族認証。緊急個人防衛機構発動」

『認証されました。スターシャ本人と確認します。緊急個人防衛機構を発動します』機械の声が地の底から響いてきた。

慌てて暗黒兵が銃を構えて赤ん坊を抱いた森雪に駆け寄った。

森雪の周囲に結晶状のバリアが形成されていった。

暗黒兵達は銃を撃ったがバリアに跳ね返された。

「王族専用の個人バリアか？」メルダーズは笑った。「地球人の森雪がなぜそれを発動できるのか、今は聞かぬ。だが、それで勝ったつもりなら勘違いというものだぞ」

「そうだ。そんなバリアは一時しのぎにしかならん」とデーダーが叫んだ。「重火器を持ってこい。確かプレアデスに、対戦車ライフルがあったな」

「ダメです。イスカンダリウムを積み過ぎて倉庫のドアが開きません」

「ええい。それならグロデーズに連絡してグロデーズの艦内の装備を持ってこさせろ」

デーダーは空を見上げた。

一同も見上げた。

暗黒優位の象徴となっているグロデーズは軌道上にあり、ここからでは小さすぎて見えなかった。

その時、空中に何かの輝点が輝いた。

「なんだあれは」とメルダーズは顔を上げた。

「大変です」と駆け寄る暗黒兵がいた。「グロデーズ試作3号艦の無限ベータ砲が爆発しました」

「なんだと？」デーダーは真っ青になった。

デスラーとヤマトが大人しくなったのは無限ベータ砲のおかげだ。それが失われては……。

「うろたえるな」とメルダーズが言った。「人質がいる限り、我らの優位は揺るがない」

「しかし……、なぜ無限ベータ砲が」

「今日、グロデーズで何か特別な予定を聞いていないか？」メルダーズはデーダーに質問した。

「はあ。確かおむつの匂いがきついで、艦内の全消毒を実施するとかで、総員一時退艦が」

「消毒ごときで、砲が爆発してたまるか」

「確かに」

「なぜよりによって今日なのだ」

「それが……。無限ベータ砲は高度な機密なので、艦内に異星人がいなくなる今日を狙って全てのハッチを開いて消毒を実施するだけ」

その時、赤ん坊を抱えた森雪が口を開いた。

「私が説明します。この中でイスカンダリウムの本物を見たことがある人がいますか？」

誰もが首を横に振った。

暗黒の幹部はサンプルすら手に入れておらず、まだ見ていなかった。  
見たことがあると言ったのはデスラーだけだった。

森雪は育児道具を収めたショルダーバッグから白い鉱物の塊を取り出した。

「これが精製したイスカンダリウムです」と森雪は言った。

「だが、なぜイスカンダリウムを持っている」

「白いおむつの間に挟んで持ちこんだからです」と森雪は微笑んだ。

「だが地球人がイスカンダリウムを持っているはずがない」

「その通りです。イスカンダリウムは放射性物質であり、地球人が持ち歩いては有害です。ガミラス人やイスカンダル人なら平気ですが」

「おまえは誰だ。地球人ではないな？」

「私はイスカンダルのスターシャ。森雪と入れ替わって、グロデーズに乗せて頂きました」

「まさか」メルダーズはアゴが外れるほど口を開けて驚いていた。

「そうか。あのデスラー艦での検討会で、良く似た地球の森雪と入れ替わったのだな？」

「ええ。おむつの異臭は薬品で付けたものです。そして、イスカンダリウムの粉末を、消毒装置にセットしておきました。無限ベータ砲には近づけませんでしたが、消毒装置は何の警戒もされていなかったなので、細工するのは容易でしたよ。おむつの消毒のために自由に使わせてもらったぐらいです」

「だが分からない。いったい何が起きたと言うのだ？」

「ガミラシウムとイスカンダリウムは接触すると爆発を起こします」

「なんだって？」メルダーズとデーダーは目を丸くした。彼らにはそこまでの知識はなかったようだ。

「イスカンダルは、ガミラシウムが欠乏したガミラス艦にのみ、少量のイスカンダリウムを提供しました。なぜだと思いますか？ ガミラシウムの在庫が残っている艦にイスカンダリウムを乗せれば爆発事故が起こって危険だからですよ」

「そんな爆発は扱いに注意すれば回避できると言って、もっとイスカンダリウムを寄越せと要求していたのだがね」とデスラーが言った。「聞いてはもらえなかった」

「しかし、小さな粉末のイスカンダリウムと、触媒として使用されたごく少量のガミラシウムであっても、無限ベータ砲を破壊するには十分でした」スターシャは言った。「これで状況はお分かり頂けましたか？」

「さて」とデスラーがメルダーズをにらみつけた。「もはや無限ベータ砲は消えた。ゴルバは半分以上地中で容易には宇宙まで上がれない。残ったのはプレアデス以下の小形通常艦ばかりだが、いずれもイスカンダリウムを搭載して輸送船状態。我々でも容易に戦える相手だぞ」

「まだだ。グロデーズそのものが残っているのなら、そのイスカンダルの王族用バリアを破壊するための重火器もすぐ届くぞ。しかも警備兵が取り囲んでいるからどこにも逃げられぬ」

だがスターシャは微笑んで指を鳴らした。

その瞬間、地面に落とし穴が開き、暗黒兵達が落とされていた。

「ここをどこだと思っているのですか？ イスカンダルですよ。私の星です」

「なるほど」とデスラーは感心した。「ガミラスに無粋な男は不要だと思っていたが、イスカンダルでも無粋な男は穴に落とされるようだ」

「何を持ってこようと、穴に落とすだけです。私は狙えません。イスカンダルの大地に立った王族の安全を脅かすことは誰にもできません」

「ならば、なぜ一度は敗北を認めたのだ」

「この娘には、人を殺して成長したという過去を残したくなかったからです」スターシャは腕の中の赤ん坊を優しい表情で見やった。

「だが、穴に落とした我が軍の兵士はどうなったのだ」

「100キロほど離れた場所に転送しただけです。全員生きていますよ」

メルダーズとデーダーは敗北を実感して肩を落とした。グロデーズの【試作3号艦】という呼称もハツリであり、実際には無限ベータ砲を備えたグロデーズはこれ一隻しかなかったのだ。ここでイスカンダリウムが入手

できなければ、二隻目以降を建造できる目処も立たなかった。そしてその事実をグロデーズに乗り込んでいたスターシャはとっくに察知済みだった。暗黒側の完敗だった。

改めて停戦が合意され、全てのバリアは解除された。ヤマト、デスラー側の全ての武器の封印解除と、暗黒艦隊の全ての武器の封印が約束され、イスカンダリウムの即時返還も合意された。

森雪の艦内服を着たスターシャは、娘を抱えたまま古代守と抱き合った。

「この服はもう脱がないといけないのね。けっこう気に入っていたのだけど」と森雪がスターシャの服をひらめかせながら言った。

「デスラー、スターシャのふりをした雪を預かってくれて助かった」

「おまえの恋人か、許せ古代」

「えっ」

「私が好きなのはスターシャだが、スターシャに似たおまえの恋人も悪くなかったぞ。少し好きになってしまいそうだった」

「ダメだデスラー、雪は渡さないぞ!」

「大丈夫よ、古代君。私の心の8割はあなたのものよ。デスラーもちょっと良かったけれど、好きなのは2割ぐらい」

「2割も好きとは許せない! 構えろデスラー!」

古代はコスモガンを構えた。

「イスカンダルで武器を使うのはいけません」とスターシャが古代の武器に手を置いて下げさせた。

仕方がないので、古代は敵意の視線だけデスラーに向けた。

「また会おう、ヤマトの坊や」

古代の敵意には取り合わずデスラーは歩き去った。

「またね!」と森雪は手をデスラーに振っていた。

## エピローグ

カウンタの数字はあと3分だった。

ヤマトはワープへのカウントダウンに入っていた。

操縦手席で、島航海長がせわしなくチェックに余念がなかった。

戦闘班長の席で、古代は手持ち無沙汰だった。

あのあと、イスカンダリウムの入手は不可能と悟った暗黒艦隊はそのまま撤収した。彼らの母星があると言われる二重銀河は、あまりにも遠く、その後の消息は良く分からなかった。しかし、なぜか森雪を気に入ったデスラーが、時々情報を森雪経由でもたらしてくれた。どうやら、スカルダートという男がクーデターを起こそうとしたが、メルダーズやデーダーの活躍で阻止できたらしい。結果として暗黒星団帝国は弱体化し、グレートエンペラー政権は維持されたものの、戦争には負けてしまったらしい。

しかし、その後、デスラーの帝国も天変地異で滅びに瀕しているらしい。戦争の天才、無敵デスラーも、突然異次元から出現した別の銀河には無力だったらしい。今回のヤマトの任務は、デスラーの新帝国の救援だった。新帝国の首都に急行し、可能ならデスラーを救わねばならない。

デスラーと森雪の間に芽生えた奇妙な愛情ゆえに、地球への便利をいろいろはかってくれたデスラーを見殺しにはできなかったのだ。

古代の心中は複雑だった。

いつの間にか仲むつまじくなってしまったデスラーと森雪。時々デスラーは森雪の部屋に夜這いに来ていたらしいが、デスラーがベッドで語る銀河中枢の情勢の情報はあまりにも貴重なので、見て見ぬふりをするのが厳命されていた。

このまま放置していれば、森雪はデスラーのところに走りかねない。

古代が振り返ると、かつて森雪が座っていた席にいるのは、真田漣という真田の姪だった。

森雪は身重だったので、今回のヤマトの航海には参加していない。

問題は森雪が身ごもった子供の父親だ。

地球人らしい肌色の子供が生まれれば問題は無い。

まず間違いなく古代進の子供だ。

その時は、美雪と名づけようと決めていた。

だが、青い肌の子供だったらどうなるのだ。

まず間違いなくデスラーの子供だ。

その時、古代はどうすれば良いのか分からなかった。

子供と言えば、スターシャと古代守の間にできた娘の現状は秘匿されていて、古代も知らなかった。

どこかで生きていたら会いたいものだ。

イスカンダル人は成長が早いと言うから、生きていればおそらく真田滯と同年齢ぐらいだろう。

どんな娘に育ったのか、あれこれ考えながら真田滯の方を振り返った。

スターシャは、二度と戦争の道具に使わせないようにイスカンダルを自爆させ、自分は古代守を伴ってどこかの星に隠棲しているという。

娘の方は、親元を離れてどこかで自分の人生を送っていると言われるがそれも噂だった。

真田滯がレーダーから顔を上げて報告した。

「周囲に障害物ありません。ワープ可能です」

「よし、島。ワープだ」と古代は正面に向き直った。

「了解。ワープの最終シーケンスに入る」島はレバーを倒した。

森雪からは、古代が望んだ愛娘の美雪は生まれなかった。その代わり、デスラーとの間に芽生えた奇妙な愛情の結晶が産まれたのはこのワープ中であつた。そして、森雪はデスラーの死を聞いて自殺した。残された青い肌の遺児はそのまま成長した。

デスラーの遺伝子を受け継いだモリ・デスラー・ジュニアが、エトスのゴレイ提督や SUS のメツラーを好敵手として地球を大軍事帝国に導くのはまだ未来の話であつた。

おわり

## 解説

本作では、暗黒星団帝国はメルダーズとデーダーの死を回避できればグレートエンペラーの失脚はなく、スカルダート政権は成立しないという解釈である。しかし、戦争中の内紛は命取りであり、暗黒星団帝国は戦争に負けて消滅すると想定している。つまり、【ヤマトよ永遠に】に相当する地球攻撃は発生していない。この時点で既に暗黒星団帝国は消滅している。サーシャはもう少し大人になってから普通の地球人としてヤマトに乗り組んでいて、【みてみて私よサーシャ】などと言わない分別が付いていると想定している。それゆえに、古代進はついうっかり真田滯と深い仲になり、森雪をデスラーに盗られた痛手を真田滯で癒す形になる。古代進は真田滯が姪だと知る前に、妊娠させてしまい、真田滯は古代進の子供を産んでしまうと想定しているが、そこまでは本編に書いていない。

森雪の自殺は、完結編の自殺未遂に対応する。完結編の自殺未遂は真田が妨害して自殺未遂に終わったが、ヤマトが航海中ならそこに真田はいない。つまり森雪の自殺は実行されてしまうという解釈である。ただし、死に向かい合って動転する相手は古代進ではなく、デスラーとしている。

このとき、デスラーは死んでいない。辺境を視察中である。森雪は早とちりで自殺しているわけである。つまり、モリ・デスラー・ジュニアは親無しではない。有形無形のデスラーの愛を注がれて育つことになる。

モリ・デスラー・ジュニアが成立させる大帝国は、地球ガルマンガミラス大帝国であり、地球、ガルマン、ガミラスの勢力圏を包含する。対立するのはボラーではなく、エトスやSUSということになる。

本作では、メルダーズやデーダーは交渉可能な常識人という解釈を採っている。それ故に、古代とデスラーに奇妙な友情が芽生える代わりに、現場指揮官の苦勞を知る者どうしで、古代とデーダーが意気投合するというアイデアも考えたが本編では使用していない。

本作で、森雪とスターシャを交換するというトリックは、両者が似ているという設定が何の役にも立っていないことから、何か使い道を考えたものである。ちなみに、森雪とスターシャの正式な本名はディアナ・スター

シャとモリ・ユキエルという設定はどこにもない。

ガミラシウムとイスカンダリウムを接触させると爆発するというのは、本作独自の設定であり、どこにも根拠はない。イスカンダルのバリアや落とし穴も同じことだ。

スターシャのコスプレをしたモリユキがデスラー艦にいるとき、デスラーと何をしていたのかに関しては、何の設定もない。自由に夢想して頂きたい。ちなみに、スターシャに横に男がいると知った直後に、スターシャによく似た女がそこにいたら、ちょっと心が動くだろう……という想定でデスラーが森雪に執着するという設定を考えてみた。

北野や徳川の出番が無いのは、若すぎて虚実交えた交渉には向かないからだ。彼らは乗艦しているがいつも留守番だったと思っても良い。坂本は警備飛行にコスモタイガーで飛んでいたかもしれない。

本作のストーリーは、宇宙戦艦ヤマト新たなる旅立ちの設定をベースとしているものの、宇宙戦艦ヤマト的ではない。理由は、交渉ベースの軍事物語は、宇宙戦艦ヤマトにおいては、もともと希薄だからだ。どちらかといえば、スペース 1999 に近いが、ストーリーが似ているわけではない。

本作のタイトルに【異聞】の文字が付いているのは、宇宙戦艦ヤマトのスタッフ、豊田有恒の著作に【異聞・ミッドウェー海戦】という異聞が付いたタイトルがあるためだ。意味は同じで、本来の定説と違った歴史の展開を想定するという意味だ。

本作で古代と雪が結ばれないのは、【ヤマトよ永遠に】で提示された【別の誰かと結ばれてしまう古代と雪】というモチーフをより拡大したものだ。ただし、【永遠に】に相当する地球侵攻が存在しないため、アルフォンは森雪の相手役になれないので、デスラーが代役を務めている。

## 遠野秋彦作品宣伝 2015/8/31 版

### ミラクル少女リミッターちゃん【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B0118UCFX0>

過大な快楽の刺激から電子頭脳の大切な回路を守るために、リミッターが設定されていた。だが、快楽の刺激への欲望に負けたロボットメイド【リ・ミッター】は1レベル1レベルとリミッターを解除していき、愛情回路、貞節回路、慎み回路、論理回路、忠節回路、誠実回路、従順回路、崇敬回路、自己保全回路と大切な回路を次々と失っていく。自分を大切する回路さえ失ったロボットメイドに待っていたのは自殺への誘惑だった。

ひたすら、快楽への欲望に負けて墜ちていくメイドロボットを見守るだけの小説だ。そのことに屈折した喜びを見出せる読者の方々へ。よろしく！  
マル計画ロボット第2号【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00V8JT3UK/>

時は 2015 年。正義をなすために作られたロボット、マルコはテロ組織の都市を破壊した。だが、被害を最小にするためには最善だったと主張するマルコの主張は受け入れられなかった。都市にいた手テロ組織とは関係ない人々を殺すことは社会が許容しなかったからだ。そこから真の正しさ、真の降伏を求めるマルコの長い旅が始まる。やがて、コロッサ計画のロボット、コロッサスがロボットだけの理想郷を作ろうと決起した。はたしてマルコがロボットの側に立つのか。それともマルコの正義を承認しなかった人間の側に立つのか。そもそも、この話はジェッ〇ーマルスなのか、鉄腕ア〇ムなのか、それとももっと別の何かなのか？

### 父殺し戦争【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B000JYDYBU/>

オランダ第2王子ジョークオル・グレスフォは実は女だった。父親の身勝手に男として育てられていたが、ジョアンナと名を変え、女性として別の星の大学に留学していた。

だが、ジョアンナには秘密があった。長年、男だという欺瞞を貫き通してきたジョアンナは男と恋をすることも許されず、いつの間にか獣や異星

人しか愛せない体質になっていたのだ。

女なのに男扱いされることに嫌気が差したジョアンナは、留学生のタバチーネ人ドッチーと駆け落ちし、宇宙船プレアデス III で勝手気ままに旅に出た。

ところが、彼らの前に謎の脅威が出現した。

人類を創造したホモ・スペリオールは、密かに人類を去勢して滅ぼす計画を立てていたのだ。ジョアンナは、人類去勢計画を叩きつぶすために実家の兄に連絡を取る。

「オランダ軍の 2 号反応爆弾を 1 つ。理由は聞かずに調達してください。兄上の力があればできるはずですよ」

だが駆け落ちして家出した妹の頼みは聞き入れられるのか？

本当に人類を創造するほど優れた者達に勝てるのか？

オランダの王室に存在しないはずの【皇帝】という肩書きを名乗る人物が出現し、謎の【監視者ファミリー】が暗躍して、ジョアンナを破滅に誘う。

ジョアンナは最後まで降参せず、ぎりぎりの矜持を貫けるのか!?

ホモ・スペリール惑星の惑星破壊ビーム砲台から放たれる超長距離狙撃が人類の居住惑星を次々と破壊していく中、はたして人類に起死回生の策はあるのか？

**アニー・ザ・ビアン・キューティー 【Kindle 版 (Amazon)】**

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00OJYDW8A/>

レズビアン、世界征服、キューティー・〇ニーという 3 大キーワードを与えられて作者が渾身で挑む問題作。

内蔵された愛情回路に強制されて戦う愛の戦士の悲しい宿命。

レズビアンの巣窟、全寮制、男子禁制の学園に送り込まれたアニーちゃんは男を忘れてしまうのか。

仮面の忍者レッドは敵か味方か。はたまた男か女か。

たった 3 分しか維持できない筋力強化でアニーちゃんは世界を守るのか!?

アニーちゃんに内蔵された空中【幻想】固定装置を敵から守り抜けるのか？

そして、アニーちゃんの死んだはずのパパが！

### 人造人魚【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00L9D496S/>

コジフ商会のキア・コジフは姉の代理で商談をまとめてきた。しかし、正体不明の MMM という商品が含まれていることに不信を感じた。そして商談の帰路に嵐に巻き込まれた。濁流のクライン川にちらりと見えた人魚はいったい何か。そして、キアは女装のメイドに招かれるままにエム・エムエ幻想国のズイン科学侯爵の屋敷に立ち寄った。だが、その屋敷こそが謎の商品 MMM の製造場所であった。はたして、こっそり製造されている MMM の正体とは人魚なのか。誰が何のために人魚を求めるのか。そして、河に中に見えた人魚の正体は？ 屋敷の入口にある肖像画の主であるゾ・フィーネという女性はどこに消えたのか？ 謎が謎を呼ぶエロティック幻想物語。

そして、屋敷の謎を解いたキアが選ぶ驚きの選択とは？

君の五感と股間を刺激する！

### コードネームはサターン V【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L5L4Q2G>

謎を提示するミステリアス小説。解くのは君だ！

独身中年男を心配する親からの依頼で、一人暮らしのダメダメ変態マニア男、佐藤有紀を監視する探偵の鞍馬七郎の物語。

そして、高級マンションで優雅に暮らす佐藤有紀が、セーラーレオタードで美少女戦士に変身して人知れず侵略者と戦うサターン V の物語。

どちらの物語が事実なのか。はたして、佐藤有紀の正体はダメダメ変態マニア男なのか、侵略者と戦うスーパーヒロインなのか。

謎の女、SOS のナナコの正体は、探偵鞍馬七郎の変装なのか。それとも、佐藤有紀をスカウトに来た銀河連邦の宇宙警察機動軍なのか。

矛盾をはらんだ物語が読者を迷宮に誘う。

真実はどこにあるのか。

結論は本文のどこかに書き込まれているぞ。

それを探す冒険物語の第3の主人公は読者の君だ!

### ミルクボーイ【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L9D48WI>

世界は核のスイッチを持つ巨大な9人の赤ん坊に支配されていた。

そして、彼らに飲ませるため、教室で搾乳する少女がいた。だがクラスメートは彼女に無理解だった。丹生川タクミは彼女を守るために立ち上がった。

ところが、支配者の1人、ホモ疑惑がある七試が男ミルクを所望したことで、話は急転する。タクミも男ミルクを下半身から搾乳される立場になった。

授乳特選隊に入隊したタクミは驚愕の事実を知る。それまで女性隊員しかいなかった極東支部には、女性用の制服しなかったのだ。似合わない女性用制服を着て七試と面会するタクミ。しかし、七試はそれを喜んだ。

はたして、七試はホモなのか?

そもそも、巨大な赤ん坊ベイビーズとは何か?

テロリストに襲撃され、配下のスタッフを多数殺された七試は、怒りに狂っておしゃぶりに偽装した核のスイッチを押した。

はたして、世界は9人の赤ん坊の気まぐれで滅びるのか?

人類は生き延びることができるか?

結末を予測不能の幻想未来冒険譚が始まる!

### リバーシブル【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRVN2>

フォッカーD21で始まり Yak-3で終わるアンドロギュノスの物語。両性具有のセクシーなレースクイーンが、君を妖しく誘惑する。学園祭で模型飛行機を展示していると、ヨーロッパのマイナー機を展示している主人公に興味を示す美女。なぜ、ゴーカートレースの事故の原因を調べてはいけないのか。研究室に出入りする美少女大学生を SM ホテルに連れ込む教授

は善人か大悪党なのか。愛する女性の淫らな光景を見ることしか許されない最悪のゲームに主人公は勝利できるのか!

NTR 成分もあるよ!

## リ・バース・リバーシブル【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRZ56>

A-1 スカイレーダーで始まり、F9F パンサーで終わるアンドロギュノスの物語。両性具有の女子大生が、一家を襲う難事件に身体を張って立ち向かう。父親の女装ホモ疑惑を必死に解消したと思うと、次は母親の失踪が待っていた。熟女天然ふたなり AV 女優としてネットで晒し者にされる母親は、本当に自ら望んでそうなったのか、それとも連絡の電子メールは母親を装った偽造なのか! アンドロギュノスから生まれたアンドロギュノスの娘が、全ての謎に立ち向かう。

リバーシブルで広げた風呂敷を畳む完結編! これを読まずにリバーシブルは終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

## 異説太平洋戦争・美少女艦隊波高し!【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00FMWSBFW>

異世界に転生した主人公は少女の姿になり、帝国女子海軍長官の美少女山本に拾われ、山口と名を変えてイギリスで近代化改装を終えた戦艦比叡受領に向かう。だが、比叡の前には戦艦ビスマルクが立ちふさがる。山口は、大英帝国海軍すら手に余すビスマルクを倒せるのか! そして、日本に帰国した山口を待っていたのは、帝国の女子海軍人気に対抗して機動部隊の指揮官に就任した巨乳の美少女乳牛ハルゼーだった。帝国海軍の主力戦艦群を壊滅させた乳牛ハルゼーに、山本、山口以下の女子海軍はどう立ち向かうのか!

艦これブームは遅すぎる。美少女+軍艦ものの元祖、1998年に書かれた伝説の小説のリバイバル再刊!

## 全ての物語に終止符を打つ最終英雄ドリアン・イルザン【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00EN7GIPC>

石屋の武器店の息子、ドリアン・イルザンは、世界の外から来たという宇宙船を偶然見つける。宇宙に乗り出したドリアンは、太古の世界が作り出した神にも等しい力を持つ2つの人形、アリシアと悦人形の対立に巻き込まれていく。アリシアはドリアンに不思議な力を持つレンズを授け、全ての物語に終止符を打つと言われるが、見たことも聞いたこともない物語の数々を前にドリアンは途方に暮れる。アリシアと悦人形による神々の最終戦争をアリシアの最終英雄ドリアンはどう決着させるのか。そして、悦人形の最終英雄、ウォー・ゼロはドリアンの敵なのか。伝説の宇宙船スカイラクはドリアンをどこに連れて行くのか。超銀河団の泡構造の向こう側に進出した超大陸級戦艦ユーラメリアは大空洞の果てに何を見つけるのか。

これは最後に読む物語ではない。

全ての始まりの物語なのだ。

読むならここから始めよ!

## ラト姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCNHE>

太古の失われた文明の時代、みなしご少女ラト・ワーゲルは小国ラルナの姫君であるミラ姫に見初められて、妹として宮廷に入る。だが、レズビアンの人として困われると思ったラトは予想に反する過酷な王宮の現実を知る。虚実の陰謀が飛び交う王宮で、ラトはミラ姫の知恵袋として破格の活躍を示す。しかし、宇宙機動遊撃軍キダシへの参加要請が届いたことで、予想もしない方向に事態は進んでいく。ラトは、宇宙艦隊の指揮官として人類を滅ぼそうとする宇宙生物ハドと立ち向かうことになる。

そして侍女志望のマイアが適性試験で見せられた異星生物の触手に身体

を犯されるラト姫の姿は真実なのか!

そして、敵に掴まり、淫らな宣撫映像に自ら望んで出演するラト姫の真意とはいったい!?

## セラ姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCWD4>

普通的女子高校生の星良は、ラト姫の娘、セラ姫として謎の少年から声を掛けられる。しかし、星良は宇宙から来たラト姫などと言う嘘くさいトンデモとは縁が無かった。ところが、詳細を確認しようと図書室で調べ始めると、ラト姫関連の資料が何も残っていなかった。マスコミであれだけ騒がれたはずの情報が何も残っていないのはおかしい。星良の真実への探求が始まる。

そして、星良の破滅願望を満たす転校生の出現。星良を校内娼婦に仕立て、破滅へと導く少年。少年はハドの探査プローブと名乗るが、ハドとは人類を滅ぼそうとする宇宙生物の名前ではなかったのか。そして、喜んでその破滅に身を委ねる星良。はたして、破滅願望を持つ星良の破綻した性格はどこから来たのか。父か、母か、それとも……。

ラト姫物語で広げた風呂敷を畳む完結編! これを読まずにラト姫物語は終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

## 魔女アーデラの事件簿【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DIQUFFS>

剣と魔法のファンタジー世界で起こる奇怪な事件。王宮から盗まれた等身大美少女フィギュアを奪還すべく、王宮シーフのマーは調査を開始する。しかし、彼に付けられた相棒は、どんな男でも関係無く喜んで抱かれる淫らな美少女魔女アーデラ。はたして、二人は事件の真相を暴き、犯人を捕まえられるのか? だが、アーデラには見た目通りではない重大な秘密

があった。そして、マール自身にも隠された重大な秘密があったのだ。はたしてアーデラはGMなのか。けして自ら語らないマールとアーサー王の秘密とは何か。互いの秘密を知った時、二人は最強のタグになる。

モンスター討伐がほとんど出てこないファンタジー推理小説!

君は腕力では無く知力を試される!

## ファンタジー勇者伝説

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00CWZTU5W>

君は知っているか! 勇者の伝説を! このファンタジー世界で辺境の魔王から姫を救った勇者の伝説を!

だが、王宮侍女のジーナは、その勇者の子孫ファッツ・ブレイブと知り合うことで、真実を知ってしまう。次々と明かされる驚愕の真相。辺境の魔王など存在してはいなかったのだ。そして、伝説の勇者とは、魔王と倒したのではなく、幼なじみの侍女を追いかけて隣国に旅した者に過ぎなかった。

勇者の伝説そのものが単なる虚構、つまりファンタジーに過ぎなかったのだ!

ジーナは叫ぶ。

一代で成り上がった新興商人の娘をなめるな!

彼女は、根性で古き因習に立ち向かい、隣国に連れ去られたプリマ姫を奪還できるのか!

イーネマス! 【全編(完結)PDF版】

[http://www.dlsite.com/maniawork/=product\\_id/RJ039225.html](http://www.dlsite.com/maniawork/=product_id/RJ039225.html)

イーネマス! 【立ち読み版(全16章のうち第5章まで。無料)PDF版】

<http://ura.autumn.org/Content.modf?id=20080428000000>

若くして死んだ有望な者達を、未来の火星の地底世界に転生させる来人制度で、同人誌即売会専用バスで死んだオタク達が転生させられた。自ら望んだ新しい身体をもらえるとあって、ある者は格闘ゲームのキャラの身

体をもらい、ある者は美少女戦士の身体をもらった。しかし、浅岳はあくまで自分のありのままの身体で若返りだけを望んだ。そして人気同人漫画家の沢渡勇太は自分でデザインした究極の美少女に身体を得ることを選んだ。二人は、火星の地底世界イーネマスに出て行くが、あっさりと人身売買される対象になり、バラバラに売られていく。

そして、浅岳が出会ったのは孤独な幼い姫君だった。

そして、沢渡が出会ったのは、奥行きを把握させない謎の犯罪組織の幹部だった。

二人は、それぞれの立場で、イーネマスを壊してしまおうと画策する破壊趣味者と戦うことを決意する。

同時進行で、幼い姫君とのストイックなラブストーリーと、あらゆる快楽に浸る淫らな TS 美少女ストーリーが同時に進行する。

はたして、浅岳は自力で奴隷の身分を脱することができるのか!?

はたして、沢渡は性奴隷からお屋敷のメイドを経て大商人の奥様に成り上がれるのか!?

二人が再会する日ははたして来るのか!?

オタクの夢、最強の格闘キャラの身体を手に入れた男は火星の地底世界で成り上がることができるのか!

TS 成分、女装成分もあるよ。

宣伝終わり